

季節を食べよう ~タンポポジャム~

こひつじ幼稚園(北海道札幌市)

[5 歳児]

保育者の願い・意図

- ・春ならではの草花に触れたり、味わったりしながら、五感で春を感じて欲しい。
- ・料理にはいろいろな方法があることを知り、やったことのないことに挑戦していろいろなことを感じ取ってほしい。
- ・友達と力を合わせて、一つのことを作り上げる喜びや達成感を感じて欲しい。
- ・調理することで、細かな植物の特色を知らせたい。

<タンポポは食べられる!?!>

散歩に行った原っぱは、一面たんぽぽだらけだった。保育者の話からタンポポも食べられる植物であることを知ると驚いていた。そして、子どもたちは興味津々で、食べ方を考え合ったり、思っていることを伝え合ったりしていた。
“タンポポのジャム”を作ることになる。

「花を食べるの？」
「どうやって食べるの？」
「ほんとに食べられるの？」
「食べてみたーい！」
「どんな味がするのかな？」
「お花なんだから、食べられるわけじゃないでしょ！」



<1日置いたら、シナシナ>

次の日、タンポポジャム作りに挑戦！保育者の幼児期の体験から、花は翌日がちぎりやすいと知っていたので、あえて1日経った物を使うようにした。

昨日より元気がないね

水がないからじゃない？



<手がタンポポ色に染まった!!>

冬が長い北海道だからこそ、春という季節の生命力あふれる木々、草花たちの息吹、まばゆい色などの恵みを沢山感じ取りながら、生活していきたい。

茎やガクから花びらだけを取り、ジャムにする事を伝えると、それを慎重に取りながら、タンポポについて知っていることや気付きを、伝え合いながら、真剣に進めていた。

「先生！手が黄色くなった！」
「花の色が移ったんだね」
「知ってた？タンポポは、黄色の花の後、綿毛になって白くホワホワになるんだよ。種は茶色になるんだよ」
「花の種のところは白いよ！」
「タンポポは2回生まれるんだよ」



<今しか食べられないものを、今、食べる>

綿毛は食べられないという事を知り、植物の食べ時などに気付き合う。

「黄色い花もフワフワしているね」
「じゃあ今しか食べられないんだ」
「綿毛になる前でよかった」
「綿毛も食べられるの？」
「本当に食べられるのかな？」
「これがジャムになるのかな」
「ミカンとタンポポは同じ色だね」

ミカンの実と皮も入れるよ



<協力し合って作る>

- ・煮詰めるまで長い時間を要した。子どもたちは代わる代わるの様子を見に来ては、焦げないようにかき混ぜ、でき上がりを期待しながら取り組んでいた。甘い香りに誘われて、他のクラスの子もたちがのぞ覗きに來たり、参加したいと申し出たりした。
- ・でき上がったジャムを、みんなで味見してみた。子どもたちは満面の笑みを浮かべて、とても幸せそうな表情をしていた。最初の一口は「美味しい」だったが、何度か味見をするうちに、色々な味覚を表現していた。
- ・危険だという事を十分知った上で、気を付けて火を扱ったり、慎重に包丁を使ったりするなどの緊張感を味わいながら作るからこそ、満足感や達成感は大きいものになる。

「うわあ～、甘い匂いがする～！」
「先生！もうできた？早く食べてみたいよ～」
「あったかくすると(火にかけると)、トロトロしてきたね」
「顔が熱いね」「湯気だよ」
「オレンジ色に変わっていたよ」



<友達やお母さんたちにふるまう>

- ・「ぼぼジャム屋さん」を開店し、みんなに食べてもらうことにした。
- ・保護者も、子どもたちの力作と春ならではの味を満喫した。
- ・その後、『ぼぼジャム屋さん』ごっこは「ぼぼジャムサンド」の他に「ぼぼジャムティー」というメニューも増えて、数日間続いた。
- ・自信をもって取り組む姿や、意欲的に活動する姿にあふれていた。



「おいし～！」
 「少し苦くない？」
 「なんか少しすっぱい」
 「タンポポって、苦いんじゃない？」
 「つぼみさんも食べたいんじゃない？」
 「お母さんにも食べさせてあげたい!!!」



いらっしやいませ～！
 ぼぼジャムサンドです



何にしますか？

「ぼぼジャム」は、春にしか食べられないんだよ

ぼぼジャムサンドをください

おいしいですよ

みんなの作った「ぼぼジャム」とっても美味しいよ！！



保護者にとっても共感できる保育をタイムリーに発信していくことの大切さを再確認した。

<考 察>

- ・ 春の植物を味わうことで、「春の味はほろ苦い」ことに気付く。経験したことが「わかる」ということは楽しいことだ。子どもたちの様々な感覚を揺さぶる生活は、「食べる」ということの意味を感じとり、「生きる」ことを考えることにつながっていく。
- ・ その季節でしか味わうことのできない遊びを展開して積み重ねていくことで、季節感を感じることや、季節の移ろいを感じていく。そのために保育者は、その季節に何を感じさせたいのか、その季節ならではのどんな経験をさせたいのかを考え、遊びを精選していくことも大切なことである。
- ・ タンポポの生態をよく知っている子どもたちであるが、綿毛になる前の旬のタンポポがジャム作りに最適だということに気付いた。子どもたちは花びらを大切にちぎった。このことは、これまで口にしてきた植物の食べ時を振り返るきっかけともなった。春の息吹、生命力など、見えないものを感じ取る活動であった。

みどころ

タンポポをジャムにして食べられるほど、しかもお客さん（異年齢の子どもたちや保護者）を呼んでお店ができるほどに作れる環境。長く寒い冬があるからこそ、タンポポの咲く春を様々な感覚で味わいたいと思う環境。このような環境があったからできる活動だという見方ではなく、このような『感性や意欲のある子どもたちと生活を作り出すことで展開した活動である』という視点が大切です。時を逃さず実態に即した援助をすることは、特に食育には欠かせません。だからこそ、子どもたちは、「今しか食べられない」という言葉が出るような体験を通して、タンポポの特徴、季節、匂いや味、食感、食べ方の工夫など、様々な学びをしています。